贊を捧ぐ

特252
728

大日本婦人會

始

特252
728

母を讃ふ

大日本婦人會發行

内容

挨拶　大日本婦人會々長　山内禎子……一

戰爭と母　海軍大佐　平出英夫……七

日本の母親　法學博士男爵　穗積重遠……二七

はしがき

昭和十七年四月二日午後一時から、本會と東京市との共同主催のもとに、昨年十二月八日ハワイ眞珠灣に護國の華と散つた海軍特別攻撃隊員岩佐中佐以下八勇士とその母を讃ふる會が、日比谷公會堂に於て嚴肅の裡にも盛大に開催せられた。

この小冊子は當日の會長挨拶、穂積男爵並に平出海軍大佐の講演を輯錄したものである。

挨拶

大日本婦人會々長　山内禎子

開會に當りまして御挨拶を申上げます。只今此の正面に凜として生けるが如き御姿でおいでになります諸勇士の御偉勳と、是等の諸勇士をお生み遊ばされました御家庭、取分け其のお母樣方の御榮譽と御手柄とは、如何なる言葉をもちましてお讃へして宜しいか、とても私の拙ない言葉では言ひ現はし得ない偉大なものでございますが、日本人の心、特に日本のお母樣方の心には言葉なくして總てが諒解されることと存ずるのでございます。御存じの通り昨年十二月八日開戰勞頭のハワイ海戰の戰果は、敵たる米國のみならず實に全世界をも震動させたのでございます。特に我が國民として忘れてならないのは、此の戰果が其の後の作戰に非常に大きな影響を與へましたことでございまして我々の敵は之が爲に逢に受身に立たざるを得なくなつたのでございます。

さうして斯かる偉大なる戰果は實に是等の諸勇士の生死を超越して決行致されました敵艦必滅の壯擧に負ふ所大であると承ります。戰ひに臨みまして一死君國に報じますこと素より我が武人の本懷と致す所とは申せ、奉公の念に燃えて悠々萬死の任に就かれました當時の有樣に靜かに思ひを馳せますれば、肅然衿を正さしめますと共に、感歎誠に極まりないものがございます。承りますれば是等の諸勇士は、既に戰前から此のことあるを豫期せられまして敵艦必滅の方策を研

究せられ、豫め上官の許しを得て密かに必死の訓練にお力めになつて居られたといふことであります。何たる崇高な御心事でございませう。此のことを考へます時に、私共は日常の生活にもつと〳〵反省すべき幾多のことがあるのではないかと存じます。曩に是等の諸勇士の芳ばしき御名前が御發表になりまするや、あらゆる報道機關はそれ〴〵調査の上奥床しき御家庭の御様子を御公表なさいました、其の一つ〳〵を今茲に改めて申上げる必要はございませんが、是等の記事を要約して考へますれば、各御家庭にはそれ〴〵形は異りますが何れも我國傳統の美風が深く根ざして居りましたことと、又お母様方が深いお慈しみの一面、極めて凛たる御躾の下に愛兒を御教育なさつたことを拜見することが出來るのでございます。誠に此の家にして此の母あり、此の母にして此の子ありと申上げて宜しいと存じます。此のことは我國の家庭教育と母性の尊さに對しまして世の認識を一段と高めましたものでございまして、是等諸勇士の千載不朽の勇名と共に、我國次代國民教育の上に永遠不滅の炬火を點じたものでございます。

本日此の催しに際しまして是等の諸勇士をお讃へ致しますと共に、其のお母様方をもお讃へ致します所以は茲にあるのでございます。私共は豫ねてより大東亞戰爭最後の赫々たる勝利は一に

銃後の固め如何に懸つて居ると承つて居ります。

只今是等の諸勇士の御武勳をお讃へ致します機會に、過去幾多の英靈に對しましても改めて深き感謝の誠をお捧げ致しまして、一層銃後の決意を固め、私共婦人の分野に於ける充分の御奉公を期したいものと存じます。

以上をもちまして私の御挨拶と致します。

戰爭と母

海軍大佐
平出英夫

世の中に母親なくして戰爭は考へられません。それは人口が段々減るからであります。併しさういふことはあり得ません。從つて戰爭は絶えない。戰爭があると致しますと玆によき母があれば戰爭は勝つといふことが言へると思ひます。よき母の下によき軍人が多く出來るからであります。ハワイの特別攻擊隊の偉勳に付きましては、既に發表の際に私は出來るだけ詳しく申上げた積りであります。それ以上に附加へることはないのであります。そこで、私は其の外の色々な實例を採りまして、戰爭と母とが如何なる關聯に在るかを、申上げたいと存じます。

戰爭には、恰も婦人は無關係といふ風なお考への方が、隨分日本にも多くはなかつたかと、私は存ずるのであります。併しながら斯かる偉い勇士方が出ました時に、それが母の感化に依るといふことをシミ〴〵と感じますると、日本のお母樣方が、自分は實際に戰爭して居るのだといふ感じを抱き始められたと思ふのであります。決して自分は戰爭と無關係ではなかつたといふお考へが、ヒシ〳〵と出て來るのではないかと私は存じます。實際其の通りなのであります。この度の戰爭になりましてから、我が海軍に於きまして、勇ましい働きをして壯烈な戰死をなさつた方々の數は、決して少くはございませんが、さういふ方々の蔭には何時でもよき母が在られたとい

ふことを、私はハッキリと教へられて居ります。誠に世にも尊いものは母であります。さうして、國家として斯かるよき母にこそ、最大の敬意を拂ひ、又感謝をしなければならぬといふことを熟〻感ずるものであります。

この度の九軍神のお母様方は、それ〴〵身分も違ひます。又生活も違ひます。學識も違ひます。併し其の間に共通して居りまするものが一つあります。それは己れを空しうする母であるといふことであります。自己といふものを顧みない母であるといふことであります。これはどの軍神のお母様方の話を聞きましても間違ひなく一致する點でございます。又私が深く感じて居りますることは、このお母様方が愚痴を言はない母である。取越し苦勞をしない母である。心の奥に非常な強さを持ちながら而も優しい母である。怒らない母、叱らない母、叱らない母であるといふことであります。その叱らないといふ中には、色々意味はあると存じます。區別はあると存じます。しかし自分が腹を立てて叱らない母であるといふこと、これだけは一致して居ります。それから心の美しい母であるといふこと、これも一致して居ります。

世の中が段々忙しくなり、又品物が乏しくなつて參りますと、お化粧料なんかも減つて參りませうし、又さういふことをやつて居る暇が餘りないといふ御婦人方が多いと存じます。しかしそのお化粧料や時間といふものとは無關係に、心を美しくすることに依るお化粧、これは何時でも又如何なる狀況の下でも出來ることであります。この軍神のお母様方は恰も斯ういふ狀況になることを前から考へて居られたかの如くに、自分の心を磨き、美しくするお化粧を心掛けられた。斯ういふことが一致して居るやうに私は觀察致すのであります。さうして尚ほ一致して居りまする點は、誇らないといふこと、この一點であります。あの軍神を生み、又軍神をあれだけにお育てになりました功績は、誠に偉大なものであるといふこと、これは軍神のお母様方に誰もが差上げる言葉であります。しかしそのお母様方の一人々々は決して誇らない、驕ぶらない、極めて謙虚な、へり下つた氣持で、自分の力で軍神が出來たといふことを決して誇らない、といふ、大きな氣持を持つて居られるといふことを感じます。

こゝにこの立派な軍神のお母様方を見る反面、私は英米の母親たちを見た經驗から、これと對照して少しくお話して見たいと思ふのであります。イギリスやアメリカにおきましては、大體人間が生きて行くその理念は自分たち或は自分が幸福な生活を送るといふこと、斯ういふ個人主義

に基いた考へ方が、生きて行く上の大きな原則であるかの如く見えるのであります。さうして結婚をした婦人が先づ考へることは自分の家に傳はる大切な系圖とか、さういふ風なことでなくて、唯自分の夫のことだけ、しかもその夫の兩親とも一緒に居たくない。それは自分たちが氣樂な生活をするのに、邪魔になるからといつたやうな氣持、さういふ所が殆ど一致して居るやうに見えるのであります。海軍で長い間の訓練を致します時に――それはアメリカなどでは、稀なことでありますが――三ヶ月以上に亙る場合には、アメリカ海軍では、ワザ〳〵一艘の船を仕立てまして、それに艦隊乘組將兵の奥さん連を乘せ、海軍の軍人がこの船を動かして、艦隊の後に隨いて、ずつと一緒に行動することになつて居ります。

これは三ヶ月以上夫が妻から離れて居つた場合には、離婚をすることが認められるといふ法律がアメリカにある、從つて若しも三ヶ月以上さういふ船を連れないでアメリカ艦隊が訓練を致しますと、訓練を終へて艦隊乘組の將兵が歸つて來た時には奥さんが居なくなつて居るといふ家が澤山出來る。さういふことになつては誠に困りますので、只今申したやうな船を仕立てて、ずつと艦隊と行動を共にするといふことになつて居るのであります。これは日本などでは全然思ひも

及ばないことであります。さうして其の場合に子供たちはどうして居るかと申しますと、それはほうり放しであります。唯奥さんだけが、其の船に乘つて艦隊の後に隨いて參るのであります。日本のお母樣方は自分の子供の教育が大切だからといふので、何も彼も犧牲にして、子供の傍に付き切りで、教育に一番力を入れて居られる。さういふのと比べまして、非常に大きな差が認められるのであります。

從つてその子供たちは大きくなりましてから、その親たちを大切にも思ひませんし、又その親に對する報恩の念も極く薄いのであります、さうしてこの氣持が段々重なつて參りますと、極端な個人主義になりまして、茲に親と子が誠に緣の薄いものとなり、又教育にも餘り關係しない遺り放しの子供が出來て參ります。さういふのと比較致しまして、我が日本の母たちが、如何に自分を犧牲にし、自分は何ものをも求めないで、唯子供を立派なものにするといふために盡して居られるかといふことを考へますと、その相違の雲泥も啻ならぬものがあることを、思はずには居られないのであります。さうしてこの差は、やがてこの度のやうな大きな戰爭になりますと、ハッキリと現はれて參ります。

アメリカの潜水艦は、これは恐らく日本の海上交通線を破壞し、日本の國民生活の物質方面を脅威せよ、といふやうなゲリラ戰を命ぜられて出て來るものと存じます。ところが彼等は實際には、どうして居るかと申しますと、こちらに爆雷といふやうな恐ろしい武器がある場合には、攻撃して來ない。さういふものを持たない危くない船、さういふものだけを狙つて來るのが普通であります。從つてさういふ恐ろしい武器を持たないといふことのハッキリして居る赤十字の病院船などは襲はれ易いのであります。又上陸部隊が上陸してしまつた後の空船になつた輸送船、是も襲はれます。その理由は誠に明白であります。死にたくないからであります。すなはち爆雷などを持つて居る軍艦を攻撃致しますと、自分たちの潜水艦が沈められるかも知れない。さうして自分は死ぬかも知れない。死ぬと幸福な生活とは誠に具合の悪い關係になりますので死にたくない。此處から出發して居るのであります。

これでは、なか〳〵勝ち戰さといふものは望めないのであります。これとは反對に、日本の潜水艦に乘つて居る勇士たちが、如何に勇敢に、如何なる危險をも侵して、敵の最も強いものを倒すといふことに、奮闘して居られるのを思ひますと、生れた時からの個人主義、生れた時からの犠牲、感謝の生活といふものが、如實に軍人一人々々の考への中に生きて參ることが、わかるのであります。

ハワイの海戰におきまして、特別攻撃隊があゝいふ誠に見上げた、勇敢な、さうして、悲壯な襲撃を決行して居りますその同じ時に、我が戰闘機部隊がヒッカムといふ敵の飛行場に現はれました。その部隊の中隊長に某といふ大尉があります。其の大尉は其處で部下と共にあらゆる力を發揮致しまして、極めて沈着にヒッカム飛行場に在る飛行機を悉くやつ付けたのであります。さうして愈〻豫定通りに其の行動が濟みましたので、自分の率る所の戰闘機隊をオアフ島——眞珠灣のある島——の一角の上空まで引連れて歸つて參りました。そこには豫ての約束通りにその戰闘機の一隊を連れて航空母艦まで歸るべき誘導機が待つて居ります。その誘導機に部下の戰闘機隊を渡しますと、その大尉は飛行機の兩翼を振つて單獨行動をとるといふ合圖を致しました。さうして引返したのであります。その時彼の飛行機は、燃料タンクに敵彈を受けまして、其處から燃料が漏り始めて居つたのであります。この中隊長の頭にはこの儘では、とても自分は航空母艦まで歸れないといふ考へがあつたのであります。そこで又元に引返しまして、ホイーラーとい

ふ飛行場の上空に參りました。さうして低く降りまして其處に在る飛行機を片端から又やつ付けたのであります。愈ゝもう彈がなくなりました。最後の一彈まで射ち盡しました。そこで彼は上空高く一度舞ひ上りまして、其處から急降下をやつたのであります。急降下と申しましても普通の斜めの急降下ではないのでありまして、眞直ぐ下に向ふ九十度の急降下をやつたのであります。さうして敵格納庫の屋根に自分の飛行機諸共自分を打付けまして其の格納庫を最後に壞したのであります。その時にはもう彈を射ち盡して居りまして、何も敵をやつ付ける方法がない。そこで自分が操縱する飛行機諸共敵の格納庫に打付けて最後の御奉公をやつたのであります。

ところがそれだけではありませんでした。その隊長機がオアフ島の一角の上空から翼を振つて引返すのを見て居りましたのは、隊長機の直ぐ後に隨いて居る二機の直屬の飛行機であります。隊長機が引返した。之を見まして彼等は、どうして自分たちだけがオメ〳〵と母艦に歸れるか。斯う思ひまして、さうして隊長機が見えなくなるまで今までの方向に飛んで居りました。それは隊長機が見える中に引返すと叱られるからであります。やがて隊長機が見えなくなつたので、其の二臺の飛行機は引返して隊長の後を追ひました。併し隊長機が何處に行つたかわからないので、

隊長機を探しもとめつゝ敵を攻擊しました。見て居つた人の話に依りますと、阿修羅の如く戰つたといふことであります。その二機も最後の彈を射ち盡すまで戰ひますと同じやうに上空高く舞ひ上りまして、さうして其處から直角に急降下して格納庫を壞して、自分も散華したのであります。

これによりまして、この隊長であつた大尉の人格、及び部下に對する訓練、教育といふものが非常によく徹底して居つたといふことがわかると存じます。全くその二機は、敵彈による故障も何も受けて居なかつたけれども、隊長獨り殺してなるものか。自分たちだけ母艦に歸るといふ法はない。斯う感じて隊長の後を追つた。さうして無傷の飛行機を以て非常な働きをして、遂に散つたのであります。

この大尉は獨り息子でありました。さうして鄕里には、お父さんは居りませんが、お母さんだけであります。非常に脊の高い、きれいな、さうして必要なこと以外は、殆ど口を利かないといふ珍らしい立派な軍人でありました。けれども戰闘機に乘る人間は、三十歳位までは結婚しない方が宜い、結婚するとどうも技能の上達が止まる。斯ういふことが豫ねゝ〳〵戰闘機隊仲間で言は

れて居りますが、その人も、矢張り三十に垂んとするまで結婚も致しませんで、童貞として、ハワイの上空に散つたのであります。

唯獨り後に殘りましたそのお母さんは、今まで苦勞して立派に育て上げた獨り息子を失つて、恐らく手中の珠を取られたやうな感じであつたらうと存じますが、誠に健氣に、御國に捧げる爲にあすこまで大きくしたのだ。育てたのだと言つて居られます。御心中は如何ばかりかと私はお察しまするが、流石に日本の母であります。總てを子供の爲に犧牲にして來て、その子供が最後に　天皇陛下に一身を捧げて死んで呉れたといふことを、涙も見せないで感謝をされたといふことであります。

それから、マレー沖の海戰に於きまして、我が少年航空兵の勇士が一分間六萬發といふ敵彈の中に突込んで參りました。その少年航空兵に其の時どういふ感じがしたか、といふことを聞きましたところが、「私は無我無中で照準望遠鏡を命ぜられた通りに睨んで居りました。さうして遂に、敵艦の甲板上に居る兵隊の青い目玉が見える位になりました。その時自分は村の鎭守のお宮にお詣りして居て呉れる自分の母の姿を見た。」斯う述懷して居るのであります。まだ女性と言へば母しか知らないやうなこの少年航空兵、其の母の姿を照準望遠鏡の中に見ながら、彼は敵艦から射ち出す一分間六萬發の彈丸の幕の中に飛び込んで行つたのであります。その翼にはバラ〳〵と敵彈が中り、又既に自分の身體にも敵彈が中るといふ激しい戰鬪、外國の飛行機なら皆逃げ歸るに違ひない所を、日本の飛行機は突込んで參りました。さうして體當り戰法でこれに猛擊を加へまして、遂にイギリスが不沈戰艦と誇つたプリンス・オブ・ウエールスを擊沈したのであります。斯樣に激しい戰ひをしながらも、母の俤を見るといふ、それ程大きな母の力といふものが、戰さをする者の頭にあるのであります。

また或る爆擊機が敵彈を受けましたために、勇敢な爆擊を行ふ前に遂に不時着の運命に陷りました。乘つて居る者も非常な傷を負ひまして、その中の一人の下士官は、遂に息を引取りましたが、その時彼は傍に居りました戰友に、「若し歸つたなら私の母に詫びて呉れないか。こんなに大した手柄も立てない中に死んでしまふのは母に對して誠に申譯ない。どうか一つ許して下さい。さう言つて詫びて呉れ。それから自分の子供は、必ず飛行家にするやうに母に賴んで呉れ。」斯う言つて息を引取りました。後でその部隊の指揮官が、內地に歸りましてから、その下士官のお母

さんを訪ねて行かれました。こんなに子供が手柄を立てずに死ぬことを母に詫びて呉れといふ、そのお母さんは、どんなに偉いお母さんだらうと思ひながら、訪ねて行かれたのであります。

ところが或る四軒長屋の一つにそのお母さんは住んで居られました。その家には疊がなくてアンペラが敷いてある。天井といふものもない、指揮官が訪ねて行かれますと、お母さんは暫くお待ちを願つて、着物を着換へて出て來られました。それが一番好い着物であつたに相違ないのでありますが、それはきれいに洗濯はしてあるけれども、膝のあたりに一杯繼ぎの當つた着物でありました。さうしてお父さんは病氣で寢たきりで動けない。お母さんだけの力で一家を支へて居る。そこへ今度頼みとする息子を失つて是から先どうなるかといふ境遇なのであります。またこの兩親たちは粟と諸だけを食べて居つた。お米は食べて居りませんでした。そのお母さんこそ、下士官が死に際して大した手柄を立てずに死ぬことを母に詫びて呉れといふその偉いお母さんであつたのであります。

また同じ指揮官の話でありますが、或る水兵の遺族の家を訪ねますとそれは田舍の本當の茅ら屋でありました。その茅ら屋に住みながら、そのお母さんは自分の唯獨りの息子が、御國の爲に非常な手柄を立てて亡くなつたといふことを聞きまして、大變喜ばれたのであります。殊にその子供が亡くなる前に最後の言葉として　天皇陛下の萬歳を叫んだといふことを指揮官が話されますと、そのお母さんは「私は何よりも嬉しうございます」といつて毅然として居られた。その指揮官は、どうしてこの片田舍の茅ら屋に斯ういふ健氣な精神が生れて來るのかと、私に話をされたのであります。

けれども偉い母といふものは、富んで居るからとか、貧しいからとかいふこととは何等關係がないやうであります。さういふことに依て差別が付くといふことはないやうであります。また忙しいから或は暇だからといふことも何等の差を作らないやうであります。唯問題は、自分の身を捨てる、自分の身を犧牲にするといふ心、唯その心だけから出て居るといふ風に私共には感じられるのであります。

この度の九軍神の中の一人の士官、この士官が最後の訣れに家へ歸りました時にお母さんに唯一つ聞いて居りますることは、「私が死んだと聞いたらお母さんは泣きはしないだらうか。」斯ういふことであります。そのお母さんは、「お前が御國の爲に好い死に場所を得て立派な死に方をする

ならお母さんは泣きはしないよ。」斯うハッキリと答へましたので、その若い士官は「それなら宜い」と安心して訣れを告げたのであります。併し軍人であるからさういふことは普通のことだ。斯うお母さんはその時考へて居られたらしいのでありますが、その士官は實は今から何日後には、自分はどうなるといふことをハッキリと承知して居つたのであります。お母さんが思はれたやうに、軍人だから戰爭でも始まりさうだといふ當時の空氣の中で、單にさう聞いたといふのとは譯が違ふのであります。その時この士官の頭には、自分は死ぬ積りで居るが、お母さんが泣いては可哀さうだといふ氣持があつたのだらうと思ひます。

この間の特別攻擊隊の發表の時にも、私は申上げましたが、出て行くその時に、「お辨當を持つたり、サイダーを持つたり、チョコレートまで貰つて、まるでハイキングに行くやうだ。」斯う言つて居ります。これは幼い子供の時の樂しい遠足の憶ひ出、それがハッキリと頭に浮んで來たのだらうと思ひます。さうしてそのお辨當が若しも自分の母の作つたものであつたらどんなに嬉しいだらう。斯う考へたのではなからうかと、私は想像するのであります。私共が子供の時分にお母さんにお辨當を作つて戴いて遠足に行く時の嬉しさ、あれを思ひ出しますとそんな風な氣がしてならないのであります。

また、その特殊潛航艇の中に組木細工の玩具を持つて行つて居ります。さうしてあの日の朝、外の艇が襲擊を開始し、また友軍の飛行機が非常な働きをして、次から次と、敵の戰艦を擊沈して行くのを見たり聞いたりしながら、自分たちは海底深く潛んで、靜かに時の至るのを待つたのであります。軍人として誰でも、早く敵をやつ付けて、手柄を立てたいといふ心に變りはありません。併しそれを晩まで待つた、その間、持つて行つた組木細工の玩具などを弄つて、時間を消して居つたらうと思ふのであります。またさう考へたからこそ、玩具のやうなものを持つて行つたのだらうと思ふのであります。幾つになつてもまだ子供の時の氣持、何にも考へないでその玩具を弄つて居つた氣持、その人はその時幼かりし日の母の姿を、頭に描いて居つたらうと思ひます。

この間子供を二人海軍の飛行將校にしたお母さんから手紙が參りました。不思議にその二人共訓練中に殉職されたのであります。兄さんの方は、もう可成り前に亡くなりました。弟さんの方が、今度中尉になつて、さうして愈々これから戰爭に行くのだといふ間際に、內地の航空隊で訓

練中に殉職されたのであります。誠に殘念であつたらうと思ひます。そのお母さんの手紙の一節を讀ませて戴きます。「思ひがけなき進級の御沙汰を賜はり、遺族一同有難涙に咽び居り候、長年の御厚恩を受けながら何等酬ゆる所なく、況して千載一遇の時に盡忠報國の誠をなし得ず、空しく散りしこと誠に申譯なく、本人の遺志と共に此の母が深く〳〵御詫び申上候（中略）二人共に武運拙なく、何を以て御詫びに代へんと思ふ此の母の胸は、張り裂け、潰るるの思ひに御座候

大君に謝し奉らん此の母も務め果して散らざりし身を。」

斯ういふ和歌がお終ひに書いてあります。自分の二人しかない子供を、二人共海軍の飛行將校に仕上げたそのお母さんが、その二人を訓練で失つたといふことを非常に殘念がつて、海軍省に斯ういふ手紙を書かれまして、申譯がない、何と御詫びして宜いかわからないと言はれる。その氣持を考へますと、日本の母といふものは實に強い母であるといふことを私共は熟と感じます。

私は申しました。母がなければ戰爭はないと。併しながら母がなくなることはないから戰爭は絶えない。ある以上は勝たなければなりません。勝つには、軍人が強くなければ勝てません。また國民全體が強くなければ勝てません。その軍人を、また國民全體を強くする何よりの根本は、その母であります。今後アメリカ或はイギリスが、日本に對して何を企てて來るか。これは的確なことを申上げることは出來ませんけれども、大體に於て航空母艦を主體とした機動部隊と潜水艦、これを以て空中からは家を燒き、また海中からは我が國民の必需品を失はせ、さうして我が國民の大切な衣食住に脅威を與へるといふことが、彼等のこれから先なし得る所であり、一番手近い方法だと私共は思ふのであります。正々堂々の陣では到底勝てさうもないアメリカ或はイギリスと致しましては、さういふ方法で、ジリ〳〵と日本の國民に、戰爭は厭だといふ感じを與へようとして來る。さうしてその中に、國民の間で仲違ひを起すといふやうなことを、狙つて居るといふことは、大體見透すことが出來るのであります。

南洋の大寶庫は既に我が手中に入りました。併しそれはまだ寶庫の扉の標札を、「大日本用」と書き替へただけであります。これから先まだ鍵を開けなければなりませんし、扉を開いて中の寶を運び出さなければなりません。更にこれを適當に加工致しまして、日本の軍需用または民需用に供し、さうして共榮圏内の各民族が、各〻その處を得るやうに、配給しなければなりません。其處まで出來まして、初めて日本の長期戰に對する不敗の態勢が、出來上るのでありまして、そ

れまでの間は、まだ物資が豐富になるといふやうな、安心は出來ないのであります。その豐富でない物資の背後から、敵の潜水艦或は飛行機が、これを脅かすといふ事態が、起るかも知れない、斯ういふことを、十分覺悟しなければならないのであります。

然らばこの敵の考へを粉碎して、長期戰に勝ち拔く方法はどうすれば宜いか。それは軍人が、敵を倒すといふことの外に、世のお母樣方が、その城とも言ふべき御自分の家庭から、どんなことがあつても、悲鳴を揚げないやうに、軍人と同じ氣持で戰ひ拔くこと、さうしてまた、次から次と、强い勇士たちを御國の爲に補つて行くやうに、お子さんの教育に沒頭されることであります。

この軍神のお母樣方の中にお喋べりの人はありません。唯默々と實行される方ばかりであります。さうして取越し苦勞をする方はないのであります。これを思ひまして、私共は日本のお母樣方に、またこれからお母樣になられんとする方々に、勝ち拔く心構へを、十分にして戴きたいとお願ひ致す次第であります。

日本の母親

法學博士
男爵　穗積重遠

只今は皆様と御一緒に感激を以て平出大佐殿の御話を伺ひました。而して私は今より一月足らず前に、同じく頭を下げ、居住ひを正し、感涙を流して大佐殿の放送を伺つたことがあります。それは卽ち眞珠灣九軍神の壯烈鬼神を哭かしむる武勳が發表された三月六日の晩でありました。三月六日は如何なる日でありますか。申すまでもなくおめでたい地久節の祭日であります。其日は甚だ恐多いことでありますが、國の母たる　皇后陛下の御德に因み奉つて母に感謝する日といふことになつて居るのでありますが、恰も其日の平出大佐殿の放送中に、斯かる軍神を出したことも歸する所母親の手柄であるといふ意味の御言葉があつたのを伺ひまして、私は實に嬉しく思つたのであります。さうして其時に私が直ぐ思ひ出しました昔話は瓜生保の母の物語でありますす。有名な話ですから御承知の方も多いと存じますが、太平記の中に瓜生保の母の物語がありますす。北陸の官軍が杣山の城を根據地にして敦賀の賊軍を攻擊に出掛けた。部隊長は里見伊賀守、それに瓜生判官保其他の將士が附いて行つたのですが、不幸にして負戰となり、里見伊賀守も瓜生保も其弟一人と甥一人も戰死して、敗れた官軍が杣山に退却して來たのであります。其部分の太平記の本文を讀んで見ませう。

「去程に、敗軍の兵共柚山に歸りければ、手負死人の數を註すに、里見伊賀守、瓜生兄弟、甥の七郎が外、討死する者五十三人、創を被る者五百餘人なり。子は父に別れ、弟は兄に後れて涕哭する聲家々に充滿たり。去共瓜生判官が老母の尼公有りけるが、敢て悲しめる氣色もなし、此尼公、大將義治の前に參つて、此度敦賀へ向うて候ふ者共が不覺にてこそ、里見殿を討たせ進らせて候へ。さこそ無念に思召され候らめと、御心中推し量り進らせて候。但是を見ながら、判官兄弟何も恙無くしてしばし歸り參りて候はば、如何に今一入うたてしさも遣方無く候ふべきに、判官が伯父甥三人の者里見殿の御供申し、殘の三人は大將の御爲に活き殘りて候へば、歎の中の悦とこそ覺えて候へ。元來上の御爲に此一大事を思ひ立ち候ひぬる上は、百千の甥子供が討たれ候共、歎くべきにては候はずと、涙を流して申しつつ、自ら酌を取つて一献を進め奉りければ、幾を失へる軍勢も、別れを歎く者共も、愁を忘れて勇をなす。」

斯ういふのであります。この瓜生保の母親は、子供五人と、それから子たちの甥ですから其母親か大伯母に當る若い甥と、それだけを從軍させて居た。其中で上の子供二人と、それから甥とは戰死し、あとの子供三人は歸つて來た。負けいくさで全軍が意氣銷沈して居る所を、自分も二人まで子をなくして居る老母の激勵で全軍が士氣を盛り返した、斯ういふ物語でありますが、此物語を讀みまして私が特に感じますことは、子供二人まで失つてもなげかないと同時に、外の三人が生きて歸つたことを喜ぶけなげさであります。その喜んだのは自分のため子供のために喜ぶのではない。皆が一度に戰死してしまつたならば、あとに殘つて大君のために忠義を盡す者がなくなる。二人は死んで忠義を立て、三人は生き殘つてなほこれからの御奉公をすることになつたのが誠に嬉しうございますといふのであります。そして「敢て悲しめる氣色もなし」とありますが、しかし他方「涙を流して」とありまして、決して不人情なのではない。母親として子を悲しまぬ者がありませうか。その悲しみの涙をはらつて、倅が御役に立ちましてとニッコリ笑ふ、これが日本の母親であります。その昔ながらの日本の母親が今日ここに又九軍神を生むといふ大手柄を立てたのでありまして、實に頼もしいことであります、有難いことであります。しかも瓜生保の母の場合は敗軍で誠に悲壯でありますが、今度の場合は一死以て大東亞戰爭大勝利の方向を決定したのでありますから、九軍神の母親方の御滿足御本懷いかばかりと、誠に感激に堪へませぬ。今一度聲を大にして申しますが、日本の母親といふものは斯の如きものであります。

しかしながらここに私が敢て皆さんにお考へを願はなければならぬことは、日本の母親はすべて又如何なる場合にもこの九軍神の母親方と同樣でありたいが、今まで果して其の通りであつたらうか、といふことであります。これは婦人だけのことではございません、男でもさうでありますが、元來日本人の道德は、戰場に臨んでは實に此上もない高い所を發揮致します。一旦緩急あれば義勇公に奉ずるといふことは、世界のどこを探してもくらべものがないのでありますが、それならば平常の道德はどうかといふことになりますと、必ずしもこれで完全無缺だとは言へないと思ふのであります。母親にしましても、愛子の應召出征を笑つて送り名譽の戰死は覺悟の前の母親ではありますが、平生の母親としていつでもそれだけの覺悟が出來て居るか。軍人の母親としては實に立派であるが、學校生徒の母親としてはどうであるか。さういふ點を今一度反省すべきであります。九軍神の母親方は平時に於ても必ず立派な母親であつたでありませう。すべての母親がどうかさうありたいものであります。かくしてはじめて日本の母親を眞に世界に誇り得るのであります。

日本の母親は特別に子供を可愛がる。これは先づ以て世界にくらべ物なしと誇り得ると思ひます。嚴父慈母と申しますが、確かに日本の母親は己れを空しくして子供を可愛がる慈母であります。しかしその可愛がり方がどうであるか。本當に可愛がつて居るのか。可愛がつて居る積りで實は虐待して居るのではなからうか。此點は大いに考へねばならぬと思ひます。殊に都會の母親或は知識階級の母親は子供のことを非常に心配します。子供のことをあれこれと心配するが、どうも其心配が度を過ぎては居ないだらうか、心配が過ぎる爲めに却つて子供を神經質にしはしないか、弱虫にしはしないか。一口に申しますと、子供に對して甘過ぎはしないかといふことが考へられるのであります。平常はさうであつても一旦緩急あればと言はれるかも知れませんが、しかし平常がさうであつてはやはり愈々の時の覺悟もあやぶまれますから、平常からのことをなほ一層注意したいと思ひます。先程の御話にもあつたやうなかや葺きアンペラ敷きの家で子供を育てる母親と、都會文化生活の母親と、果していづれが日本の母親であり得ませうか。どうかすべて○日本の母親が眞の日本の母親でありたいものと思ひます。

母親が子供に甘いものだといふことは、昔から言はれて居る。德川時代の川柳の好題材になつて居ます。川柳といふものは口の惡いもので、人のアラを拾つて大げさに言ひ立てますから、そ

れを全部採り上げるではありませんが、中には人情の機微を穿つて成程と思はせるのがあります。江戸の町家によくあることですが、道樂息子に對して父親がカン〳〵におこつて小言を言ふ、さういふ場合の母親の立場がむつかしい。どうかするとむやみに子をかばひます。「棒ほどのこと針ほどに母隱し」針小棒大の逆で、息子の大きな過失を母親が父親の前に出來るだけ小さく見せようとする。又息子が父親に嘘をつくのを、「母親は息子の嘘を足してやり」といふやうなことになります。さういふことをするものだから息子を本當の道樂息子にしてしまふ。「半分は母手傳つてドラにする」と川柳は皮肉ります。息子を軍神にするのも母であり、ドラ息子にするのも母であります。そこをよく考へなければならぬ。さういふ風だから子供は母親に感謝せずして却つて甘く見る。「母親は勿體ないが騙しよい」甚だ怪しからぬ川柳ですが、子供にさういふ氣持を起させてはお仕舞だと思ひます。子供を可愛がるのはよいが、甘やかすのはいけない。犬猫が子をねぶるやうなやり方ではだめです。日本の母親として最も大切なのは、結局子供の躾だと思ひます。

この子供の躾といふことにつきましては、成程西洋の母親はイザといふ時の覺悟は足りないかも知れませんが、日常生活の躾は中々よくするのであります。西洋の事は何でも惡いと思はずに、其點を日本の母親は考へなければなりません。イギリス、アメリカの母親の話は此際止めることに致しまして、同盟國たるドイツ、イタリーの母親の話を致しますが、私がドイツに行つて居つたのは此前の歐洲大戰の前でありますから、かなり古いことでありますが、或時私がベルリンの往來をあるいて居りますと、向ふから母親に手を引かれた可愛い女の兒が來る。如何にも可愛らしいお人形のやうな子供であります。私は子供が好きだものでありますから、摺れ違ふまで目を離さず其子供を見て居りましたが、あまり可愛いので見足りないやうな氣がして、行き過ぎてから私は振り返つて其子供の方を見ました。さうするとその女の兒も、向ふから言へば私は異人さんですから、變な異人さんが來ると思つて見て居つたのでせうが、同時に振り向いて私の方を見た。すると母親がいきなり女の兒の耳をグンと引張つたのです。それは往來で向ふから來る人の顏をジロ〳〵見るといふやうな不作法なことをしてはいけない。殊に摺れ違つてから振り向いて見るなどは最も失禮なことだ。さういふお行儀の惡いことをするなと平常よく教へてあるのに、今女の兒が振り向いたので、耳をグンと引張つて叱つたのであります。私は本當に自分が耳を引張られたやうな氣持がしまして、これには實に恐縮すると同時に敬服したのであります。

それからこれは私が直接見た話ではありませんが、或る日本の婦人がイタリーで汽車に乘つて居た。丁度其客車はすいて居て、向ふの隅に母親と可愛い子供が乘つて居る。何でもクリスマスの翌日か何かで、田舎のお祖父さんお祖母さんの所へクリスマスのお祝ひによばれて行つた歸りらしい。網棚の上には色々なおみやげが載つて居る。さうすると子供が頻りに何か母親にねだつて居る。何でもおみやげに貰つて來たお菓子を此處で食べて宜いかといふことらしい。初め母親はいけないといつて居るやうだつたが、結局宜しいといふことになつた。さうすると子供はイソ〳〵と網棚からチョコレートの函をおろしてつまうとした。それを母親がチョット止めて子供にめくばせすると、子供はチョコレートの箱を持つて日本婦人の所へ來て、どうぞ一つといつてそれを差出した。いきなり自分がつままないで人樣に先づ勸めるといふ行儀作法、それがちやんと平常子供に教へてあるのであります。さういふやうな日常生活の行儀作法といふやうなことについては、日本の母親はもう少し考へなければならぬ。それが又積り積つてやがて一旦緩急ある場合の立派な態度にもなるのだらうと思ふのであります。

さて立派な人が出るのは母親がえらいからだといふことはいつも言はれることでありますが、其例はいくつでもあります。私の專門の方の關係のことを一つ申しますと、先年なくなられた近頃での名裁判官で大審院長になられた横田秀雄博士、私の最も尊敬した大先輩の一人でありますが、さういふ立派な人が出來たのは矢張りお母さんが偉かつたのであります。今こゝでそのお母さんの話を詳しくする暇はありませんが、横田龜代子といふこのお母さんが子供たちを育てたその躾け方が實に立派なものであつたらしい、娘さんの一人の和田英子さんの書かれた「我が母の躾」といふ小册子がありますが、これは實によい本でありまして、日本の母親の躾け方がよくあらはれて居ます。横田母堂は武家出でありますから、武家風のいくらか古風な躾け方でありますが、しかしこれは今の家庭教育にもよく當てはまると思ふのであります。お母さんが始終言つて居られたことを娘さんが書かれたのでありまして、三十二項ありますが、其中の少しばかりを讀んで見ませう。先づ「植木を見よ」と標題して、

「子を育てるには、乳をのむ時から追々仕込まねばならぬ。小さいからと申して氣まゝにさせて置いて、大きく成つて急に、行儀だ、言葉だとやかましく申しても直るものではない。あの植木を見よ。小さい時から始終氣を付けて手を入れた物と、生れたまゝにして置いた物と、ど

の位の違ひがあるか知れぬ。大きくなつて枝をためたり、切り込んだりしても、木がいたむばかりで、とても、小さい時から手を入れた木の樣にはならぬ。それと同じ事で、はひ〳〵をせぬ前から始終氣をつけて教ふれば、本人は少しも難儀とも、つらいとも思はず、自然に覺ゆるけれど、大きく成つて俄かに教ふれば、本人はきうくつで苦しいから、つい人前ばかり行儀其他をよくして、人の居らぬ所であしくする樣になり、とても本當の躾けは出來ぬ。」

斯う書いてあります。これは成程尤もなことだと思ひます。それから又、「母の言ふ事を信じさせよ」と題して、

「子供には決してその場のがれの事を申してはならぬ。たとひ手遊一つにても、遣はすと口外した時は必ず遣はさねばならぬ。其他物見遊山外出何事に係はらず、約束を守る事を母自身より守つて見せねば、母を子供が信用せぬのみならず、子供が約束を守らぬ人となり、末には人から信用されぬ人となる。つゝしむべきは母たるものの一言一行である。」

お母さんはあてにならぬ、好い加減なことばかり言つて居ると子供に思はれるやうになつてはおしまひです。それと同時に、「子供に物を申付けたらぜひ從はせねばならぬ」といふので、

「子供に物を申しつける時、能く〳〵考へ、無理でない事を申しつけ、申付けた上は、ぜひぜひ其樣にさせるくせをつけねばならぬ。子供が氣が向かぬとて其儘捨て置くくせを付ける時は學校へ出ては先生の仰をそむき、役を勤めても上官の命を奉ぜぬ樣になり、遂に身の立たぬ樣になる基だ。」

とあります。命令する時によく考へて、無理でない命令をくだし、命令した以上は必ずそれに從はせろといふのでありまして、命令が行はれずに其儘になつてしまふとか、面倒だから自分がやつてしまふといふやうなことではいけない。これは實に大切なことで、立派な軍人を作る根本もこゝに在るのだらうと思ふのであります。更に一つ大切なことを横田母堂が言つて居る。

「自分の子供の可愛い事を思つたら、人の子も可愛がらねばならぬ。是が人のたつとい所だ。鳥獸は我が子はなめる樣に可愛がるが、我が子でない者はつゝいたりかみ殺したりする。人も自分の子ばかり愛して他人の子を惡めば、鳥やけものと何も違ふ事はない。」

これは實に大切なことだと思ひます。ツイ自分の子供といふ考へが先になつて、人樣の子はどうでもいゝといふことになりさうですが、これはとんでもない事です。我々が子供を可愛がるの

は何のためか、天子様の御役に立つ立派な國民にしよう、將來の國民たるべき立派な人間に仕立てようと思へばこそ、自分の子供を可愛がつて養育するのです。それならば自分の子供だけでなく人樣の子供も同じに立派になつて貰はねばならぬ。みんなで力を合せてみんなの子供を立派にしよう。隣組は隣組で、町内は町内で、立派な子供を育てるために協力するといふことでなければならぬと思ひます。他人の子供を蹴落して自分の子供さへ成功すればよいといふのではいけない。個人々々の子供ではない、我々全體の次の日本人だ、我々が二十年三十年の後安心して日本國を引渡すことが出來るやうな立派な次代の國民をみんなで育て上げるのだ。我が子の人の子の人樣の子の御世話もしたい。斯ういふことにならなければならぬと思ひます。

私は今日の女子教育の結局の目的は良い母親、立派な母親を作ることだと思つて居ります。そんなことを言つたつて、結婚しても子供のない人もあるだらう。或は何かの都合で結婚しない人もあるだらう。子供がなければどうするかと言はれるかも知れませんが、もし子供がなければ人の子供を皆自分の子供と思つて可愛がつて戴きたい。又子供のある人も、唯自分の子だけでなく次の時代の國民をみんなで立派に育て上げるといふ氣持になつて戴きたい。これが私は日本の女の任務だと思ひます。日本の婦人は皆日本の母親であつてほしいものです。

學校教育の大切な事は申すまでもありませんが、我國としては更に一層家庭教育に力を入れたいものです。家庭教育は家庭で行はれるのですが、假に各家庭をそれ〴〵一つの學校であるとするならば、父親は家庭といふ學校の校長であり、母親は擔任教師であります。校長と擔任教師との息がピッタリ合はなくては教育といふものは出來るものではありません。校長は教育の大方針を決め、設備を整頓維持し、時には修身の講義ぐらゐはしますが、直接に子供を取扱つて教へ込んだりしつけたりするのは擔任教師の仕事である。擔任教師が校長を尊敬せねばならぬのは勿論ですが、校長としては擔任教師の威嚴が立つ樣にしむけねばなりません。もし學校で生徒の見て居る前で校長と擔任教師が喧嘩をしたらどうですか。擔任教師を校長が無暗と叱り付けたり、擔任教師が校長さんに反抗したりするやうなことがあつたらどうですか。生徒は果して先生を信用するでせうか。家庭に於ても其通りで子供の前での夫婦喧嘩は禁物であります。夫婦喧嘩も子供の教育についての意見の相違などは先づ上等の部ですから、絶對にするなではありませんが、子

供の前では父親は母親を立てゝ、子供が母親の躾に從ふやうに父親も脇から助けなければいけないと思ひます。日本の婦人が立派な母親になることが大切であると同時に、日本の婦人を立派な母親にすることが大切です。男ばかりが威張つて女を叱り飛ばして自ら快しとして居るやうでは、立派な母親は出來ないし、立派な子供は出來ません。學校に於て校長と擔任教師が力を合せるやうに、家庭では夫婦が本當に氣を揃へ仲をよくして立派な子供を育て上げねばならぬ。子供を立派に育て上げるといふのは、たゞ自分の家を繁昌させようとか、自分が後に子供にかゝつて樂をしたいとか、さういふ氣持でないことは勿論であります。さういふ小さい量見でなく、本當に我々の後を引受けて御國のために働く國民　天皇陛下の御家來の一人として我々の忠義を受け繼いでくれる子供を殘すのが我々の使命であります。我々は現在に於てそれ〴〵分相應に御奉公をして居ります。しかし此御奉公を何時までも續けたいと思つても、我々の壽命には限りがあるけれど、もしこゝに立派な子供を殘して自分たちの後を繼がせ得るならば、我々の御奉公は永遠に續きます。これが本當の不老不死であります。それにつけてもどうか御婦人方に良い母親になつて戴きたい。さうして日本の子供をみんな立派な子供にして戴きたい。我國が西洋諸國にすぐれて居る點は數へ切れない程ありますが、其一つは母親が立派であることでありまして、平田大佐殿も言はれたやうに、米英の母親とは天地雲泥の相違であります。此母あつてこそ眞珠灣の九軍神も生まれた。軍神の母親は默々として自慢も吹聽もされないが、やはりお母さんが偉いのだといふことになつた。これは日本婦人のために實におめでたいこと、愉快なことであります。今こゝで日本の母親は斯ういふものだといふ立派な代表が出たのでありますから、此「日本の母親」の名をどうぞ汚さないやうに、あの九軍神のお母さんは偉いけれども其外はといふことにならないやうに、有名になつたのは九軍神のお母さんだけだけれども日本の母親はみんな斯うだ、成程これでは幾ら頑張つても日本にはかなはない筈だとイギリス、アメリカをして兜を脱がせる。其結局の勝利の根本が日本の母親に在るといふことにしたいものだと思ひます。今日の催しは軍神と其母親を讃へる會でありますが、私は更にこれを全日本の婦人を鼓舞激勵する會にしたいと思ひまして、あの三月六日の放送を伺つて以來の感激を率直に申述べた次第であります。

434
431

昭和十七年七月　十　日印刷
昭和十七年七月十五日發行

非賣品

編輯兼發行人　東京市麴町區麴町四丁目七番地
大日本婦人會內
高　樹　嘉　一

印刷所　東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社
東東二三

發行所　東京市麴町區麴町四丁目七番地
大日本婦人會
電話九段(33)四九九一・四九九二
四九九三・五〇一四
五〇一五・五〇八九

終